姨捨山

楠山正雄

一

むかし、信濃国に一人の殿様がありました。殿様は大そうおじいさんやおばあさんがきらいで、

「年寄はきたならしいばかりで、国のために何の役にも立たない。」

といって、七十を越した年寄は残らず島流しにしてしまいました。流されて行った島にはろくろく食べるものもありませんし、よしあっても、体の不自由な年寄にはそれを自由に取って食べることができませんでしたから、みんな行くとすぐ死んでしまいました。

国中の人は悲しがって、殿様をうらみましたけれど、どうすることもできませんでした。

すると、この信濃国の更科という所に、おかあさんと二人で暮らしている一人のお百姓がありました。ところがおかあさんが今年七十になりますので、今にも殿様の家来が来てつかまえて行きはしないかと、お百姓は毎日そればっかり気になって、畑の仕事もろくろく手がつきませんでした。そのうちとうとうがまんができなくなって、「無慈悲な役人なんぞに引きずられて、どこだか知れない島に捨てられるよりも、これはいっそ、自分でおかあさんを捨てて来た方が

安心だ。」と思うようになりました。

ちょうど八月十五夜の晩でした。真ん丸なお月さまが、野にも山にも一面に照っていました。お百姓はおかあさんのそばへ行って、何気なく、

「おかあさん、今夜はほんとうにいい月ですね。お山に登ってお月見をしましょう。」

といって、おかあさんを背中におぶって出かけました。

さびしい野道を通り越して、やがて山道にかかりますと、背中におぶさりながらおかあさんは、道ばたの木の枝をぽきんぽきん折っては、道に捨てました。お

百姓（ひゃくしょう）はふしぎに思（おも）って、

「おかあさん、なぜそんなことをするのです。」

とたずねましたが、おかあさんはだまって笑（わら）っていました。

だんだん山道（やまみち）を登（のぼ）って、森（もり）を抜（ぬ）け、谷（たに）を越（こ）えて、とうとう奥（おく）の奥（おく）の山奥（やまおく）まで行きました。山の上はしんとして、鳥（とり）のさわぐ音（おと）もしません。月（つき）の光（ひかり）ばかりがこうこうと、昼間（ひるま）のように照（て）り輝（かがや）いていました。

お百姓（ひゃくしょう）は草（くさ）の上におかあさんを下（お）ろして、その顔（かお）をながめながら、ほろほろ涙（なみだ）をこぼしました。

「おや、どうおしだ。」

とおかあさんがたずねました。お百姓は両手を地につけて、

「おかあさん、堪忍して下さい。お月見にといってあなたを誘い出して、こんな山奥へ連れて来たのは、今年はあなたがもう七十になって、いつ島流しにされるか分からないので、せめて無慈悲な役人の手にかけるよりはと思ったからです。どうぞがまんして下さい。」

といいました。

するとおかあさんは驚いた様子もなく、

「いいえ、わたしには何もかも分かっていました。わ

たしはあきらめていますから、お前は早くうちへ帰って、体を大事にして働いて下さい。さあ、道に迷わないようにして早くお帰り。」

といいました。

お百姓はおかあさんにこういわれると、よけい気の毒になって、いつまでもぐずぐず帰りかねていましたが、おかあさんに催促されて、すごすごと帰って行きました。

道々捨ててある木の枝を頼りにして歩いて行きますと、長い山道にも少しも迷わずにうちまで帰りました。

「なるほど、さっきおかあさんが枝を折って捨てて歩

いたのは、わたしが一人で帰るとき、道に迷わないための用心であったか。」と今更おかあさんの情けがしみじみうれしく思われました。そんな風でいったん帰りは帰ったものの、縁先に座って、一人ぽつねんと山の上の月をながめていますと、もうじっとしていられないほど悲しくなって、涙がぼろぼろ止めどなくこぼれてきました。

「あの山の上で、今ごろおかあさんはどうしていらっしゃるだろう。」

こう思うともうお百姓はどうしてもこらえていられなくなりました。そこで夜更けにはかまわず、また

さっきのしおり道をたどって、あえぎあえぎ、おかあさんを捨てて来た山奥まで上がって行きました。そこに着いてみると、おかあさんはちゃんと座ったまま、目をつぶっていました。お百姓はその前に座って、

「おかあさんを捨てたのはやはりわたくしが悪うございました。こんどはどんなにしてもおそばについてお世話をいたしますから。」

といって、おかあさんをまたおぶって山を下りました。

それにしてもこのままおけば、いつか役人の目にふれるに違いありません。お百姓はいろいろ考えた

あげく、床の下に穴倉を掘って、その中におかあさんをかくしました。そして毎日三度三度ごぜんを運んで、
「おかあさん、御窮屈でも、がまんをして下さい。」
と、いろいろにいたわりました。これでさすがの役人も気がつかずにいました。

二

それからしばらくすると、ある時お隣の国の殿様から、信濃国の殿様に手紙が来ました。あけてみると、
「灰の縄をこしらえて見せてもらいたい。それが出来

なければ、信濃国を攻めほろぼしてしまう。」
と書いてありました。その国は大そう強くって、戦争をしてもとても勝つ見込みがありませんでした。殿様は困っておしまいになって、家来たちを集めて御相談なさいました。けれどだれ一人灰の縄なんぞをこしらえることを知っている者はありませんでした。そこでこんどは国中におふれを出して、
「灰の縄をこしらえてさし出したものには、たくさんの褒美をやる。」
と、告げ知らせました。
すると、何しろ灰の縄が出来なければ、今にもこの

国は攻められて、ほろぼされてしまうというので、国中のお百姓は寄るとさわるとこの話ばかりしました。

「だれか灰の縄をこしらえる者はないか。」

こういってさわぐばかりで、一向にいい考えは出ませんでした。

お百姓はふと、「これはことによったらうちのおかあさんが知っているかも知れない。」と思いつきました。そこで、そっと穴倉へ行って、おふれの出たことを詳しく話しますと、おかあさんは笑って、

「まあ、それは何でもないことだよ。縄によく塩をぬ

りつけて焼けば、くずれないものだよ。」

といいました。

お百姓は、「なるほど、これだから年寄はばかにできない。」と心の中で感心しました。そしてさっそくいわれたとおりにして、灰の縄をこしらえて、殿様の御殿へ持って行きました。殿様はびっくりして、御褒美のお金をたんと下さいました。

とても出来まいと思った灰の縄を出して渡されたので、お隣の国の使いはへいこうして逃げて行きました。

三

しばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが一つの玉を持って来ました。いっしょにそえた手紙を読むと、この玉に絹糸を通してもらいたい。それが出来なければ、信濃国を攻めほろぼしてしまうと書いてありました。

殿様はそこで、その玉を手に取ってよくごらんになりますと、玉の中にごく小さな穴が曲がりくねってついていて、どうしたって糸の通るはずがありませんでした。殿様は困って、また家来たちに御相談なさいましたが、家来たちの中にもだれ一人、この難題をとく

者はありませんでした。そこでまた国中へおふれを出して、曲がりくねった玉の穴に絹糸を通す者があったら、たくさんの褒美をやると告げ知らせました。これでまた国中のさわぎになりました。けれどやはりだれにも変わった智恵の持ち合わせはありませんでした。

すると、こんどもお百姓は穴倉へ行って、おかあさんに相談をかけました。おかあさんは笑って、

「何でもないことだよ。それは、玉の片かたの穴のまわりにたくさん蜂蜜をぬっておいて、絹糸に蟻を一匹ゆわいつけて、別の穴から入れてやるのです。すると

蟻は蜜の香りを慕って、曲がりくねった穴の道を通って、先へ先へと進んでいくから、それについて糸もこちらの穴から向こうの穴までつき抜けてしまうようになるのだよ。」

といい聞かせました。

お百姓はそう聞くと小踊りをして、さっそく殿様の御殿へ行って、首尾よく玉の中へ絹糸を通してお目にかけました。

殿様はびっくりして、こんどもお百姓にたくさん、御褒美のお金を下さいました。

お隣のお使いは絹糸のりっぱに通った玉を返して

もらって、へいこうして逃げていきました。その使いが帰って来ると、お隣の国の殿様も首をかしげて、

「信濃国にはなかなか知恵者があるな。これはうっかり攻められないぞ。」

と考えていました。

こちらでも、さすがにこれで敵もあきらめて、もう来ないだろうと思っていました。

四

ところがしばらくすると、またお隣の国の殿様から、

信濃国(しなののくに)へお使(つか)いが手紙(てがみ)を持(も)って来(き)ました。手紙(てがみ)といっしょに二匹(ひき)の牝馬(めうま)を連(つ)れて来(き)ました。

「いったい馬(うま)なんぞを連(つ)れて来(き)てどうするつもりだろう。」とびくびくしながら、殿様(とのさま)が手紙(てがみ)をあけてごらんになりますと、二匹(ひき)の馬(うま)の親子(おやこ)を見分(みわ)けてもらいたい。それができなければ、信濃国(しなののくに)を攻(せ)めほろぼしてしまうと書(か)いてありました。殿様(とのさま)はまた、連(つ)れて来(き)た二匹(ひき)の馬(うま)をごらんになりますと、大(おお)きさから毛色(けいろ)まで、瓜(うり)二つといってもいいほどよく似(に)た馬(うま)で、同(おな)じような元気(げんき)ではねていました。殿様(とのさま)はお困(こま)りになって、また家来(けらい)たちに御相談(ごそうだん)をなさいました。それでもだめなので、

また国中におふれを回しまして、
「だれか馬の親子を見分けることを知っているか。うまく見分けたものには望みの褒美をやる。」
と告げしらせました。

また国中の大さわぎになって、こんどこそうまく当てて、御褒美にありつこうと思う者が、ぞろぞろ殿様の御殿へ、お隣の国から来た二匹の牝馬を見に出かけました。ところがよほど見分けにくい馬と見えて、名高いばくろうの名人でも、やはり首をかしげて考え込むばかりでした。そこでお百姓はまた穴倉へ行って、おかあさんに相談しますと、おかあさんは

やはり笑って、

「それもむずかしいことではないよ。亡くなったおじいさんに聞いたことがある。親子の分からない馬は、二匹を放しておいて、間に草を置けばいい。するとすぐ草にとりついて食べるのは子供で、ゆるゆると子供に食べさせておいたあとで、食べ余しを食べるのは母親だということだよ。」

と教えました。

お百姓は感心して、さっそく殿様の御殿へ行って、

「ではわたくしに見分けさせて下さいまし。」

といって、おかあさんに教わったとおり、二匹の馬

の間に青草を投げてやりますと、案の定、一匹ががつがつして草を食べる間、もう一匹は静かに座ったままながめていました。それで親子が分かったので、

殿様はそれぞれに札をつけさせて、

「さあ、これで間違いはないでしょう。」

といって、使いにつきつけますと、使いは、

「どうも驚きました。そのとおりです。」

といって、へいこうして逃げていきました。

殿様はこれでまったく、お百姓の智恵に心から驚いてしまいました。

「お前は国中一ばんの智恵者だ。さあ、何でも望み

のものをやるぞ。」

とおっしゃいました。お百姓はこんどこそ、おかあさんの命ごいをしなければならないと思って、

「わたくしはお金も品物もいりません。」

といいますと、殿様は妙な顔をなさいました。お百姓はすかさず、

「その代わりどうか母の命をお助け下さい。」

といって、これまでのことを残らず申し上げました。殿様はいちいちびっくりして、目を丸くして聞いておいでになりました。そして灰の縄も、玉に糸を通すことも、それから二匹の牝馬の親子を見分けたことも、

みんな年寄の智恵で出来たことが分かると、殿様は今更のように感心なさいました。

「なるほど年寄というものもばかにならないものだ。こんど度々の難題をのがれたのも、年寄のお陰であった。母親をかくした百姓の罪はむろん許してやるし、これからは年寄を島流しにすることをやめにしよう。」

こう殿様はおっしゃって、お百姓にたくさんの御褒美を下さいました。そして年寄を許すおふれをお出しになりました。国中の民は生き返ったようによろこびました。

お隣の国の殿様もこんどこそ大丈夫と思って出し

た難題(なんだい)を、またしてもわけなく解(と)かれてしまったので
がっかりして、それなり信濃国(しなののくに)を攻(せ)めることをおやめ
になりました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：土屋隆
2006年9月21日作成
2009年9月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。